

## 統合保育における障害児の社会的相互作用の促進

○三谷嘉明、西野知子、梶田孝子  
(愛知県コロニー発達障害研究所) (春日井市立西部保育園)

はじめに、統合保育は障害児と健常児が共に学び、共に遊び、社会的相互作用の深まりを期待している。障害児と健常児との社会的相互作用は自然に深まることもあるが、保育の積極的な働きかけの必要なことが次第に明らかになってきている。

研究目的。本研究は統合保育における一障害児と健常児の社会的相互作用を促進するため保育士以下、Tとする)がいろいろな保育場面で機会あるごとにどのような働きかけを行ったかについて分析する。

方法。被験者。自閉傾向のある男児、現在5歳(昭和56年11月生れ、以下Mとする)。観察方法。原則として週一回(夏休み、冬休みは除く)、午前9時10分～午前11時40分まで(日によっては多少、時間異なる)。観察場面は全保育場面(登園から朝の集まり、設定保育・自由あそび、給食準備・給食)をVTR録画した。観察期間は昭和61年5月から昭和63年2月までで、計60分を分析対象日とした。(61年34日、62年26日)統合保育の形態。61年度は夏休みまで、障害児クラスで保育時間の大部分を6名一緒に3名の担当保育士の下で過ごしていたが9月以降、大部分を統合クラスで過ごす。62年度はほぼ100パーセント、統合クラスで過ごす。M児の行動特徴。観察開始時の61年5月頃は言葉は「アアア、ワーワ、ヤイヤイヤ、ウオーウオー」という発音である。非常に多動で自分のクラス、統合クラス、乳児室、園長室とたえず動いている。運動場では一人ぶらつき、友達をさせている。物置やスベリ台が大好きである。対人関係はもっぱら担当Tとの間にあるのみである。

結果。M児の担当保育士(T)はM児に対し一貫した指導方針でのぞんでいたが、以下の様に要約できよう。(1)M児が興味を持って始めた活動は満足するまで続けさせ、自発的活動をできるかぎり尊重している。(2)活動はTが主導するよりも、M児が始めた活動を一緒にやって行い、微妙に発展させている。(3)場合によってはM児の活動を予測し、発展させるためのリードがあるが、その場合でも、M児が援助を求めるといざりざり待つタイミングがよく要求に答えるという援助ぶりである。(4)場面の切り替えの際は保育プログラムに従わせるより、今行っている活動とある程度満足するまでやらし、タイミングを見はからって次の行動目標を

明示する。(指さしと言葉かけを基本に、指中を軽く押す、合図等もある)。5)M児の行動はほとんどほめ、承認し、自信をつけさせている。しかることはほとんどない。6)M児の活動の変化、長所を機会あるごとに健常児(Fとする)に説明し、M児への理解を深めさせている。他のTに対してもそうである。

(II)全統合場面に見られるTのMと健常児(F)との相互作用の促進を意図した働きかけは分類すると以下の様になる。もちろん便宜的に分類したものであって分類には重複あるところがあると思われる。

1)共同活動を通して社会的相互作用の促進。M児とF児がある共通の目標を目指し、それぞれが目標に向けて一定の役割と責任を引きうけ活動を展開する。Tが積極的に介入したり、課題を準備する。例えば以下の様な事例がこれに当てはまる。

○ケーキ作り。砂場でMとFがバケツに砂を入れていた。Tが「M君、ケーキ作ろうか」と誘う。数人のFがまわりをとりかこむ。何人かのFがローソク、イチゴを見て嬉しげに、葉っぱを集めてきてM児に手渡す。Tが「ケーキを分けようか」というと、F児は口々に「M君、ケーキちょうだい」といって手をさし出す。M児はその一人ひとりにケーキを配る。F達はM児と一緒にケーキ作りに参加し、ケーキを味わう。

○郵便ごっこ。M児がモンテッソーリの文字ゴム印押しをしていたが郵便ごっこに発展。M児はFの右前を押し、箱をもち出し、包装し、ひもでくくり、地図や住所を書き、切手をはって、隣室の部屋に持って行く。その過程の中で、まわりのF達は紙を押し渡したり、ゴム印を渡したり、セロテープを手渡したり、共に参加している。あるF児はハサミ、ホッチキスを持ってくる。M児のやろうとあることがわかると、F児達もそれぞれ自分なりに協力しながら参加できる。Tは要所要所で声かけしている。

○新幹線ごっこ。M児はバスなど乗物に興味を示し、かつ人間に関心をもちはじめた頃のことである。Tは厚紙で新幹線を製作した。M児はそれを見つ、新幹線の窓の中に入れて次々と人間を書き込んでいった。沢山のF児がM児をとりかこみ見ていた。Tが「～ちゃんも乗せてあげようか」というと、M児は次々とFを指さしながら、窓に書き入れる。おしおし。「M君、

集せて!」、M児とF児達は共通意識で共同作業を行っている。

○フルーツバスケットあそび。クラス全員が丸くなってイスにすわっている。TはM児が知っているFの知前を呼び、Fは手をあげ、そこにM児はフルーツ(ブドウ、バナナ etc)が貼ってあるカードをFの首にかける。FもM児が上手に首かけできるか見守っている。数人のFに無事手渡すことができた。また、パパ(バナナのこと)とM児が発声すると一斉にバナナの人を立ち上がり席を入れかえることでM児も得意になる。

○色水の分配。プール時の頃のこと、TはM児の知っている3色(赤、青、黄)のキューブからバケツにそれぞれ注入する。それを見て数人のFが集まってくる。水をかきまぜているM児にFがコップを手にし、「M君、ちょうだい」とさし出す。Tが「M君、ちょうだいってよ」というと、M児は得意になってコップに色水を注ぎ込む。「M君、ありがとう」とFはいう。Tが「次の方どうぞ」と手助けしている。自然に「どうぞ」、「ありがとう」の言葉がとびかうちでやりとりが展開している。

2). 日課の中で機会をとらえて社会的相互作用の促進。日課の中には非常に沢山の活動要素がある。その中でM児とF児の社会的相互作用を促進する機会を作ると思われる幾つかの活動を特定し、それに対し集中的かつ自然に特定の手段で配慮される。

○乾布まさつ、体操、朝の集まりの終了後、クラスに帰る時、M児は特定のF児と手をつなぐ。M児はごく自然に手をつないでクラスに帰るし、F児はM児の活動に関心をもちつづける。

○乾布まさつの時、M児に関心をもちているF児を隣りに並ばせ、お互いの背中をさしごしごしふき合う。

○設定保育の課題遂行中のハサミ、のり、色紙のうけわたし、食事準備の皿やスプーン、パンのうけわたし算の時、「ハイどうぞ」、「ありがとう」といわせるが、M児の動作に伴ってTがかわりにいう。

○給食の準備はまずワゴン車に食器・食物が乗せられるとT(時にFも加えて)と一緒にクラスにもってくる。配膳(皿、パン、スプーン)を手伝う。M児が知っているF児の知前をTがかよび、そこにM児は配膳したり、自主的判別で配膳したりする。M児にとって楽しい、自信に満ちた活動の一つであり、F児もM児の活動を頼もしそうに見ている。食事前のトイレ、手洗い活動の際、F児と活動を共にする中でいろいろなやりとりのあることはいうまでもない。

3). M児とF児の社会的相互作用を促進する媒介者としての役割。TはM児の行動が何を意味しているかF児にその都度わかるように翻訳したり、説明することやF児のM児への理解の深まりを図る。M児の長所や微妙な行動変化、要求の仕方がF児に理解でき、M児への適切なかかわり方のヒントを与える。

○M児は6/年10月頃から急に図形や印象深い出来事を画用紙や黒板に描きはじめた。M児は描くことで自己を表現する方法とその楽しさを味わっている。F達もかきせんM児の描く内容に興味を持ち出す。描く内容は週単位でとんとん変化し、62年後半にはその日の出来事を脚座に描いて表現するまでになる。

○M児は黒板一杯を使って描く。Tはそれを見て数人のFに、「今、M君は何々を言っているよ」と説明したり、M児に対して「M君、これは何、へへ書きたいのね」、あるいは「そうだね、M君すごいねね、わかった」といいう。M児は得意になって無中で描きつづけたF児はよくわかり興味をもって絵の進行を見つめる。描く内容は日ごころからM君の興味や関心かどこにあり、今何に取り組む、家庭で何かあったかと熟知していないと判読はむづかしい程度の表現力ではある。それでも担当TにとってはM児の表現しようとするイメージは正確に読みとれる様で、M児も満足そうである。

○Tは次々に描く作品を黒板や壁に展示する。興味を持つF児にたいぬいに説明し、変化に気づかせている。

4). F児が自主的に、適切にM児にかかわれる様になることを意図したTの働きかけ。

○TがM児にかかわっている、そのひねわり方をF児に説明しながら、具体的に演習したり、実際にFにやってみてもらったりする。靴のはかせ方、手の洗い方、列の並び方、フランク押し、なわとび等、機会あるごとにF児にゆつくり、動作で演習しながらTはF児にTの機能、モデル機能と自然のうちに教えている。

5). TはM児、F児にとってのモデルになる。

○製作等では製作過程をゆつくりと実演することでM児、F児の双方のモデルとなっている。

○種々の行事・活動では意識的にモデル的行動ETは取っている。

考察。Tの行動の分類と2、3の具体例をあげてきたが、社会的相互作用の生起には本児の場合、長い期日とTのきめこまかな配慮、それにF児の主体的なかわりか重要であることが指摘できよう。

(付記 春井市西部保育園の諸先生、園児に感謝します)